

資料 Notes

今日のロンドン建築について (その1)
—ロンドンの北から中心部にかけて

松本俊夫

On London's contemporary architecture (Part 1)
—From north London to central London

Toshio MATSUMOTO

Abstract: I have been in London from 1st September 2003 to 31st August 2004 as a visiting researcher. I stayed at the British Architectural Library (RIBA Library, RIBA: The Royal Institute of British Architects) in order to research building materials and construction. I am interested in not only building materials but also building construction system and process. During researching period, I collected some materials on London's contemporary architecture at the Library and did the field researches by means of taking some photographs on the sites of these architecture. I mainly researched some architecture from north London to central London on about the straight course. This report deals with some traditional and modern architecture, some restoration and new architecture in London. There is a part of modern architecture which is called as Hi-tech in the United Kingdom.

Keywords: RIBA Library, London, Contemporary architecture, Hi-tech

I. はじめに—ロンドンについて¹⁾

人口：ノルマンの征服時1100年には約15,000人。次第に増加して200年後に80,000人。1600年までに200,000人となった。1666年の大火までに375,000人に拡大する。それから3つの地域に分割される—歴史的City, Westminsterを軸に延びた郊外の開発, 外側のマーケット庭園の地域およびテムズ川の北・東・南方面。建築法規を確立し, 1920年代の二連戸郊外住宅にも影響を与えた典型的形式のレンガ造テラスハウス Terrace Houseを確立したのはこの時期である。ロンドンはすでに煙った, 非衛生的な工業地域であった。

故 John Summerson は1615年の空からの景観を述べている。—テムズの変わらぬ流れがある。ロンドンはその浅いカーブの一つであり, 緑色と教会の鉛屋根の混った赤い屋根のモザイク模様である。ぼんやりした緑の中に古代の壁の線が見える。西には明らかに分離して Westminsterがある。教会・修道院の周囲には赤い屋根の植民地がある。ロンドンと Westminsterの間には川を縁どる建物の列がある。川の北に数年以内に Covent Garden と Lincoln's Inn の二つの矩形が結晶する。その周囲の住居は統一され, 破風なしの正面で, 整然とした規律で目立っている。

1666年後の発展について, Summerson は言う。—大火以前から西部でレンガ工事が盛んに行われている。Lincoln's Inn, Covent Garden, St. James' の周囲の道は住居で埋められている。広場が Soho などにでき, そこから新しい道路が各方面に伸びている。

1720年後について Summerson は言う。—West end 内部にある古い切妻の街が清楚に整えられた街をつくりつつあることに注目する。レンガ造が赤よりも灰色や褐色になりつつある。Westminster で新しい橋の工事が行われるのが見られる。しかし, St. Paul's Cathedral の頂上で(晴天の日に)まだ全部の City を見わたせる。

1700年と1750年の間に, 人口は674,500人から676,750人に上った。1801年までに0.9–1.1 m 人でその大半はテラスハウスに住んでいた。多くは流行のジョージア様式 Georgian の West ロンドンのスクウェア Square やテラスに住んでいた。1831年に1.66 m 人, 1861年に3.323 m 人で鉄道は外側の郊外へ延びていた。

この時期について Summerson のコメント—1801–03年は最初のドック建設の時。ドック地域には褐色のコテージ Cottage 街ができ East end の侵入者を遠く Essex 地域へ運ぶ。

ロンドン周辺は猛烈な勢いで動いていた。全ての外側道路にはテラスやヴィラ Villa が並んでいる。街路と広

場の間は充満している。ロンドンの衛星ヴィレッジ Village はもはやヴィレッジでなくなった。Hackney, Islington, Fulham, Chelsea は郊外である。

1921年までに7.5 m 人で、中央テラスとアパートメント Apartment に分散する一戸建て二連戸ヴィラの新しい郊外住宅が鉄道と道路網により用意される。

1951年に8.2 m 人。この時までには、鉄道や道路網による郊外住宅の発展によりロンドンの定義がますます混乱していた。1939年に最大人口8.6 m に達した。ロンドンは今や拡大 South-East 地域の外側の住宅地域は Green Belt により中核地域（‘Greater London’）から分離された。1965年にこの地域の管理は the Greater London Council (GLC) に委ねられたが、1986年サッチャー政権により解散された。2001年までロンドンはその独自の市長と GLC を持たなかった。

建築材料：1666年の大火と、それに伴う火災の危険を減少するための建築法規ができる前は、大半の建物は木造であった。新しい建築法規は通常材料として、れんが、石、粘土、スレート屋根瓦を指定した。黄色の‘ストック’れんが‘Stock’ Brick, 白いポートルランド石 Portland Stone, 灰色のスレート屋根瓦が都市の多くを支配する。ロンドンで最も特徴的な建築材料は、ロンドン‘ストック’れんがで通常黄色をしている。もとは手造りでロンドン地域から、一部 Kent から川をのぼって来た。19世紀初期までに原料が使い尽されたが、新しい運河（18世紀後半）が外部地域から首都へ供給を可能にした。Grand Union Canal の堤に沿ってれんが工場が拡散した。1840年代および50年代までに、機械造りのれんがが鉄道により Midland 近くの鉱山から（例、Bedfordshire）運ばれるようになった。

ポートルランド石は、Dorset の南海上の Portland 島から来た。テムズ川を上ってロンドンに着いた。

この頃では、しばしば大面積のハイテクガラス張りや相殺している塗り仕上げとメタル外装を用いる‘Layered’ Construction をロンドンに再び採用して、経済的制約、新建築法規、省エネ対策が効果的に古い建築の伝統に取って代っている。

建築の時期と様式：

初期

• Roman-1615：ロンドン塔により象徴されるノルマン征服以前のもの、ローマ人が残したものは多くない。

趣味、規則、ロマンス

• 1615-1820：王直属としてパラーディオ主義 Palladianism の紹介をした Indigo Jones から他のパラーディオ再興やジョージア様式の発展の変換期を通して Wren, Hawksmor, Gibbs などのバロック Baroque まで。

17世紀後半に発展したスクウェアとテラスのタイプにより特徴づけられる。この時期、宗教的異議に苦しめられて、改革と反乱は産業革命と明確な美の信念として

現われる。ドックの建物と倉庫にみる崇高なものとピクチャレスク Picturesque, John Nash の仕事は Regent Street と Regent’s Park に、Sir John Soane’s house はこの輝かしい時期の個人的記念碑となる。

混乱と発展

• 1820-1920：急進的な時期で、ゴシック Gothic でギリシャ様式 the Greek が偏向される、ロマン主義 Romantic で功利主義 the Utilitarian が偏向されるといった様式闘争により特徴づけられる。終わりのないテラスハウスの列とともに人口がロンドン内部に流入し、最初の公共住宅の開発がなされ、列車、地下鉄、乗合バスのような新しい輸送システムが行われるようになる。

この時期は、新しい建築タイプ Building Type が導入され、建築と工学 Architecture and Engineering の融合もみられた。（この時期のハイライトは、1851年の大博覧会でモダニズム Modernism の源の一つとされる。英国の工学の専門的技術のあけぼのであるとする歴史学者がいる。）良いネオ・ゴシック建築 Neo-Gothic Architecture は William Butterfield の All Saints, Margaret Street と George Street の Law Courts in the Strand で代表される。

この時期は王の大言壮語で終り、ドイツの皇族が養子になってイギリスのウィンザー家の名になった。瀕死の工芸と古建築に新しい感性が吹き込まれ、City の多くの‘荘厳様式’の建物‘Grand Manner’ Buildings と共に‘Wrenaissance’（暗黙のうちの反パラーディオと反バロック）として知られるようになったものへのノスタルジアがみられる。

中間

• 1920-1945：19世紀の機械による価値が大陸の新しいモダニズムに翻訳されていった戦争の間の時期はロンドンに残されているものは少ない。（テクトン Tecton のように優れた先駆者による Finsbury Health Centre, Highpoint flats, Emo Goldfinger’s home in Hamstead を除いては。）どちらかといえば、Edwin Lutyens の仕事により代表される。第二次大戦の前の時期に有名になったカントリーハウス Country House よりも今や彼は‘Grand Manner’の商業作品を企画している。（例えば、Moorgate の Britannic House や Poultry の Midland Bank HQ。）

科学知識を先導する芸術

• 1945-70：芸術（建築として）が進歩的および楽天的モダニズムにより科学知識を導こうとしていた時期。それは、Scandinavia (Alvar Aalto), France (Le Corbusier), USA (Mies の Chicago, SOM の New York, Charles and Ray Eames の California 等) の影響がみられる。その多くは大きな都市再開発プログラムを発信した。（例えば、Camden の建築家達の仕事により例証される。）ブルータリズム Brutalism が発見され、ポップ・アート

Pop Art が発明された。LCC (London Community Council) の Royal Festival Hall はこの時期の初めから目立つ建物である。Denys Lasdun の National Theatre は終りの時期である。中間に、Brunswick Centre と Alexander Road のような階級的価値観に反対の立場をとる住宅計画がある。

ポスト・モダニズム、ハイテク、見えない手

• 1970-90: 社会的に方向づけられた建築プログラムが退いた時、商業建築が優勢になった。80年代のブーム年に絶頂に達し、ドックランド Docklands 再開発が顕著である。建築のポスト・モダニズム Post-modernism は1970年代前半に US 輸入として到着し、ハイテク Hi-tech に適合させ始めた初期の社会指向モダニズムに取って替った。主な建物は、Terry Farrel (Embankment Place), Robert Venturi (Sainsbury Wing), Jim Stirling (Clare) および Richard Rogers (Lloyd's) である。Broadgate と Canary Wharf は都市の変化を具体化した。型の闘争は1990-94年の後退時期に突然止んだ。建築家達は、アメリカ的価値よりも大陸の方へ再び指向した。

荘厳企画と社会

• 1990-現在: この時期は、1970-90年(再び2003年の終りまで)のブーム年を引き継いで、Richard Rogers の Dome, Herzog & de Meuron の Tate Modern, Norman Foster 事務所の増殖企画, Jubilee Line の目立つ幾つかの駅、多くの新しい商業ビルのようなミレニアム荘厳企画 'Grand Project' に支配された。Canary Wharf は第2段階に入った。City は変化を続けて成功の高いシンボルを見出した。

ロンドン中に大きなアパートメント・ブロックが拡がり(特に、ドックランドで良い例は Albion と Montevetro を含んでいる。), さらに、幾つかの新しい社会指向型建築が建てられた。(例えば、Peckham Library, Stratford Circus, Plashet School bridge, the Laban Centre.)

II. 今日のロンドン建築ーロンドンの北から中心部にかけて

ロンドンの中心部を縦断する地下鉄に Northern Line という線がある。中心部である Trafalgar Square から北へ地下鉄で約30分の Finchley を出発点として南下しながら、今日のロンドン建築を観察する。

1. Finchley の街並²⁾ (図1): Ballards Lane は Finchley Central と North Finchley の間の主要ルートで長く続いている。街並は、エドワード様式 Edwardian と後の時代の店とフラット Flat が並んでおり、同時代の隣接の Street がくっついている。

2. Cornwall House と街並 (図2, 3): Ballards Lane から入って Cornwall Avenue があり、その一軒が18世



図1 Finchley の街並



図2 Cornwall House



図3 Cornwall House

紀頃といわれる Cornwall House である。正面スタッコ仕上げの3ベイ bays で、後部はれんが積みの上に白い塗装。全体に白い仕上りの小さなしゃれたヴィラである。

3. Monor House in the Sternberg Centre for Judaism (図4, 5): East End Road にある高いれんが壁に囲まれた初期ジョージア様式の住宅。記録では1504年に堀内に Mansion が建てられ、Finchley の Submonor の家だったものをロンドンの Bishop が所有し、中世を通じて



図4 Monor House



図6 Holcombe House



図5 Monor House

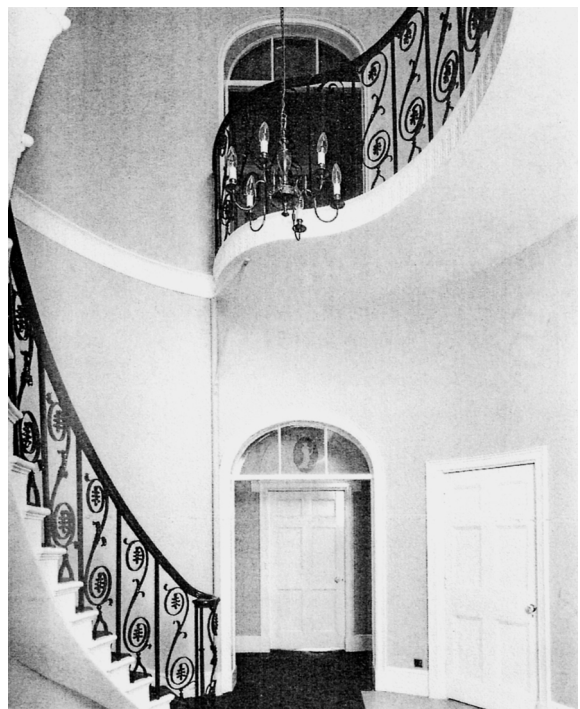


図7 Holcombe House

ロンドンの富裕な商人が続いて所有した。1622年に Edward Allen の所有となり子孫の Sir Thomas Allen が 1723年に新しい場所に再建した。現在は、学校に使われている。

建物は北東に面して、大きな平面的な荘厳な様式で地階の上に3層。中央ベイは少し突出している。装飾は、平面的で粗面仕上げのドア回り、隅石、パラペットの壺に限られている。窓楣は研磨れんがの直線仕上げ。入口横の階段手摺は元の鉄製、入口ホールは2つのベイを占めて、ねじった手摺と縦溝のあるコリント式 Corinthian の親柱のついた立派な階段をもって堂々たるパネルを張った階段ホールとなっている。(3つの

ベイの応接間の壁と天井のプラスター装飾は20世紀初期のものと思われる。) 上の階の部屋は中廊下の両側に配し、平面的なパネル張りや付柱により構成されている。南東側に第2階段がある。19世紀終り近くまで島の回りに長い運河があった。

4. Holcombe House (図6, 7) : Finchley Central 駅から1駅奥に入った Mill Hill East から数分の Holcombe Hill にあるロンドン Missionary Institute の中心にある。ハンサムな2階建てで、3つのベイをもつスタッコ塗りのジョージア様式のヴィラ。John William Anderson の為に Leicester の John Johnson が1775-78年に建てた。Anderson は1797年にロンドンの Lord Mayor だった手袋商人であった。

精巧なディテールの正面は、一見控えめなスケールで、

3つのベイと塗装しないスタッコの粗面仕上げの1階、アーチの中に引き込んでいる窓により側面を固められている半円形の玄関、縦溝のついた付柱のある2階、手摺のあるパラペットなどが目に付く。楽しい内装として、楕円の玄関ホールでは、鍛鉄製の手摺が優雅に湾曲しながら片持梁の階段を2階へと導いている。後の小さな穹窿ヴォールト Groin Vault になっているロビーは2つの部屋につながり、部屋の内装は優れたネオ・クラシカル Neoclassical の塗工事である。

5. East Finchley Underground Station (図8, 9, 10) : Finchley Central Station から1つ南の駅で、1939年 Charles Holden と L. H. Bucknell の設計で Northern



図8 East Finchley Underground Station



図9 East Finchley Underground Station

Line の終着駅として駅長室とともに造られた。1996年 Avanti Architects により改装されている。西へのオフィスの幾分不釣り合いな長いウィングに赤レンガが使われている。ガラス張りの3重窓により明りとりされる。ビスケット・クリーム・タイル張りが緑あるいは黒の細かい帯状タイルで縁取りされた内装がロビーを始め随所に見られる。プラットフォームは片持梁のRC(鉄筋コンクリート)屋根、統一されたサインと照明。線路は、バウハウス調に曲面ガラス張りのらせんRC階段によりアプローチされるオフィス橋で横断されている。(パラペットの上には射手の金属彫像が North Middlesex の森の狩の者を象徴している。作者は Eric Aumonire。)

6. Highpoint 1³⁾⁴⁾ (図11, 12, 13, 14) : East Finchley から1駅南の Highgate Station の近くに建つフラットで、Lubetkin & Tecton の設計により1933-35年の計画・施工。構法面からみて、すべての壁・床はスラブ構造のRCできています。外壁に支柱はなく支柱と梁と一体に結合しているように処理されている。フラット内には縦方向の梁が走っているが、戸棚に隠されている。床は全ての風圧を受け持っている。壁と床の厚さは、互いに連続していることによって減少されている。全部の壁



図10 East Finchley Underground Station



図11 Highpoint 1

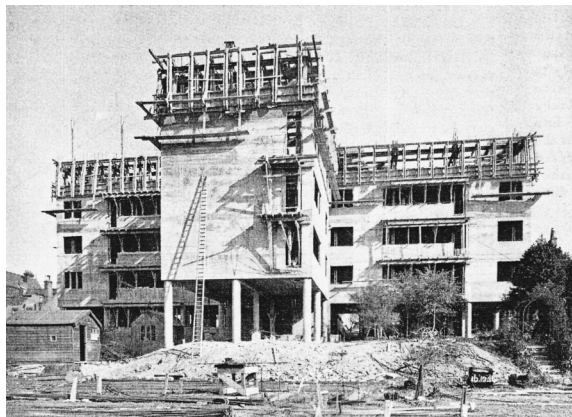


図12 Highpoint 1

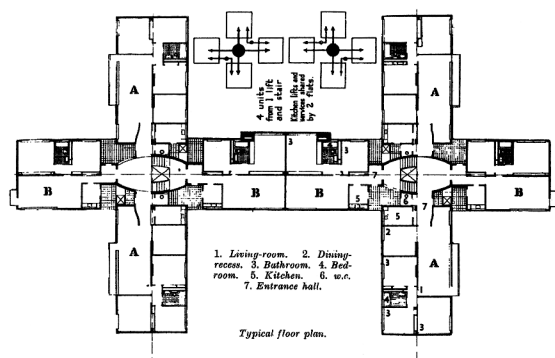


図13 Highpoint 1

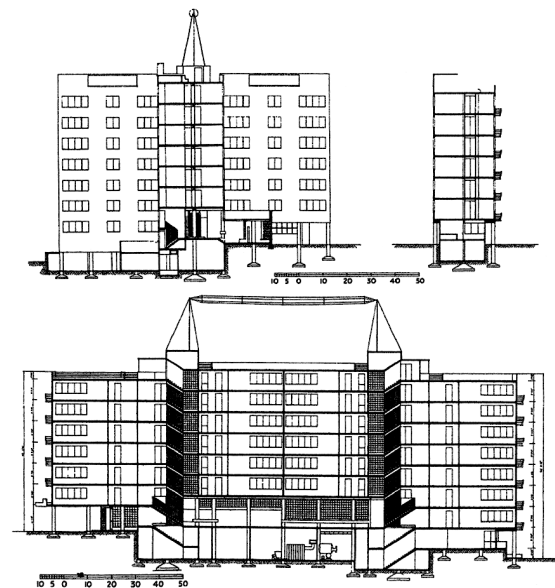


図14 Highpoint 1

は静力学的に働いており、比較的多くの配筋がなされている。それは、構造クラックと収縮の可能性を減じ、型枠工事が早くて安価にすむ。床の部分は殆ど障害物なしで設計し易い。外壁はRCで、内部の型枠板として用いられる1 inに圧縮された瀝青入りコルクが張られて遮断されており、内側はプラスター塗りで、外側は白い塗

装である。

この構法により、かなりの固定荷重を節約し、支柱・付柱等の形での障害から全ての壁を解放することができる。梁の出っ張りや支柱がないので仕上げや内装の自由が莫大なものとなっている。

1階は全てRC柱となっていて、それにより建物は全てのモーメントや風圧からくる力を負担し得る一種のRCテーブルの上に支えられている。勿論、これは1階が住民にとって広くて自由な公共空間となることを可能にしている。

コルク張りの壁の断熱係数は良く、38 in厚のれんが壁の熱損失に匹敵する。また、或程度の遮音効果もある。

床構法：3/8 inのコルク・タイル（中弾性）+3/4 inの下塗り（硬）+1 inの瀝青コルク（高弾性）+1 inの下塗り+瀝青紙の層+4 1/2 inのRCスラブ（コルク層は、両方とも瀝青マスタックで接着）、RCスラブの下側はプラスター仕上げ。

この構法は、スラブを通しての垂直方向の十分な遮音効果がある。下塗りはコルクにより壁から離れているので壁への振動の伝搬を防ぐ。全部の間仕切はフェルトの台の上であり、床の衝撃から分離されている。

間仕切は2 inの軽量ブロック Breeze Block で両側プラスター塗り。2つの部屋間の間仕切はいつでも2重にして内部は戸棚に利用できる。各フラット間の遮音は充分に考えられている。プラン上、フラット間の境界壁は殆ど存在しない。各フラットが別のウィングにあるからである。

暖房は、フラット全館に天井パネル・ヒーティングが採用されている。部屋の用途別に温度レベルを変えており、バス・ルームのタイル張り床は、床の中のパイプで暖房される。

窓面積が大きくて、周辺の隙間があるにも拘らず州当局から自然換気が要求されたので、サッシの上の内側からグリルでカバーされた引込み形のサッシで自然換気が得られた。換気孔の導入は部屋に隙間風が入るが、換気孔の位置はカーテンにより隙間風が入るのを防ぐ可能性がある。

構造はOve Arupが担当しており、コンクリート工事にスライディング・フォーム工法が採用されている⁵⁾。

Highpoint 1に続いて、Highpoint 2が計画・施工された。

7. St. Jude on the Hill⁶⁾ (図15, 16, 17, 18) : Highgateから南西方向にHamstead Heathを横切った所にGolders Greenがある。そこにSir Edwin Lutyensが計画したCentral Squareにある1つの教会で、多作の建築家の最上の教会といわれる。1909年Hamstead Garden Suburbの中心になるものとして設計された。LutyensのCentral Squareの設計は、17世紀後期のイギリスのスタイルで、壁の材料は銀灰色と赤のれんがによってい



図15 St. Jude on the Hill

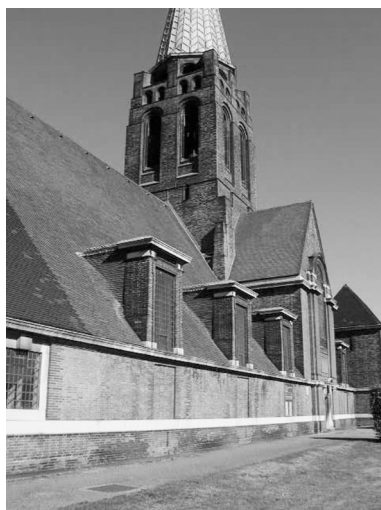


図16 St. Jude on the Hill

HAMPSTEAD GARDEN SUBURB, ST JUDE'S CHURCH

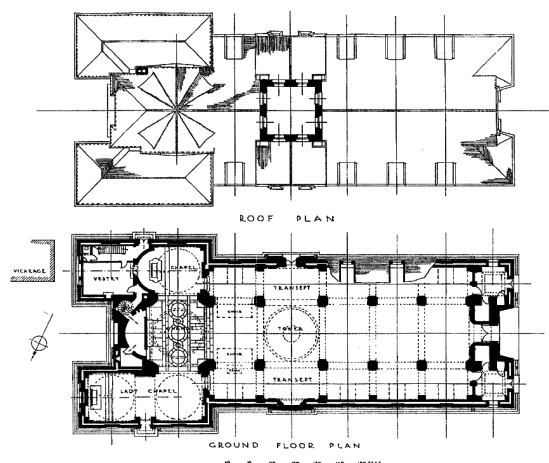


図17 St. Jude on the Hill

HAMPSTEAD GARDEN SUBURB, ST JUDE'S CHURCH.

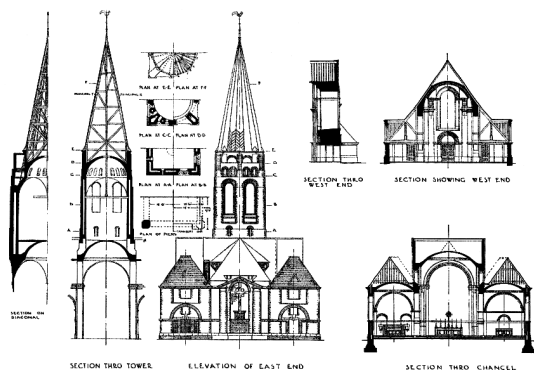


図18 St. Jude on the Hill

る。

教会は、ゴシックの姿をしている一方で折衷様式である。Lutyens はロマンチック-ビザンチン Romantic-

Byzantine と呼んだ。しかし、英国バロックと内部に Quattrocento の影響も同じように強くみられる。

身廊と側廊は通常とは異なって地面近くまで巨大なスレート葺き屋根で覆われている。これは、教会が周囲の家々を圧倒するのを避けようという Barnett 夫人の要請に基いている。屋根は非常に高いドーマー窓で被われている。東側チャペルは別々の勾配屋根になっている。この中世とバロックの特徴の不調和は Lutyens が楽しんだに違いないところである。

(1915年に建てられた) 高い交叉タワーは、ビザンチンのれんが工事を想わせるオープン・アーチ積みと

山形鉛細工のゴシック尖塔を持っていて壮観である。

(註) Sir Edwin Lutyens (1869-1944)⁷⁾⁸⁾: 彼は建築史家により現代風潮の祖としては認められてこなかった。事実、H. R. Hitchcock が‘最後の伝統主義者’と呼んだように、完全に現代風とは距離をおいていた。彼は、自由なプランや進歩した技術象徴主義に興味を示さなかった。彼の膨大な300もの建物と計画は、伝統建設技術に魅入られ続けており、過去から借りていることを明らかに示している。単にモダンと称するプランにのせた立面的装いとしてでなく、機能的に明確に異なる部屋のスケールとディテールにおいて示している。

Lutyens は、Frank Lloyd Wright と全く同年代であり、C. R. Mackintosh より1年若く、C. F. A. Voysey より12年若かった。正式な教育を受けることなく (Gertrud Jekyll と共に) Surrey の Thursley の自宅の周りの地方特有の建物を学ぶ時期を待った。(Jekyll は非公式の English Cottage Garden の発明者だった。) 1887年に Sir Ernest George の事務所に入り、そこで後の共同者 Herbert Baker に会った。わずか2年後に独立し、1889年から1912年の間に多くの目立った住宅を建てた。彼の仕事が1921-25年の Britanic House, 1924-29年の Midland Bank H.Q. のような大きな商業建築の方へ変化して行くにも拘らず、1912年以後も住宅の計画を受け入れ続けた。これらの住宅において、彼は初期の建物で達成された多くのアイデアを用い続けた。

Lutyens の住宅は、革新的な思想はないが、同時代の人々と分け合った輝かしい思想の総合といえる。

様式的にも専門的にも Lutyens に最大の影響を及ぼしたのは Richard Norman Shaw (1831-1912) である。Shaw は彼の住宅の様式をバロック・クラシズム Baroque Classicism へと発展した。Lutyens はこれを完全に平行してトレースした。その一部が1907年の作品に

見られる。(図19, 20)

8. Superstore for Sainsbury, in Camden Town⁹⁾¹⁰⁾¹¹⁾
 (図21, 22, 23, 24, 25, 26) : Northern Line を南下して
 Central 入口の分岐点として Camden Town がある。
 Camden Road と Kentish Town Road の間で1915-38年
 工場があり、道路は運河により横断されて見捨てられた
 場所であったが敷地として開発の機会が与えられた。
 Nicholas Grimshaw and Partners の設計で1985-88年に
 計画・施工された。

Camden は、店だけでなく新しい住居と産業をもって
 最大限に敷地を利用するよう要求した。Grimshaw は載
 荷地域、管理施設、地下駐車場、
 開発の北側の運河沿いに住居と一
 緒に全くの無柱売場地域を供給し

た。彼によれば、本当は郊外に欲しいような都会の過密
 地区のスーパーマーケットを設計するのが趣旨であっ
 た。灰色の鋼骨組と灰色のアルミ外装による航空機の格
 納庫あるいは戦艦のように全部灰色で、ハイテクの
 ルーツを説きあかすような気難しい工学のイメージを楽
 しんでいる。そのような建物が建築的品質を持つだけで
 なく、都会的形を持つことを示している。

2つの特徴があり、1つは、向いの18世紀後半のジ
 ョージア様式のテラスに関連づけてベイのリズムを与え



図19 Heathcote

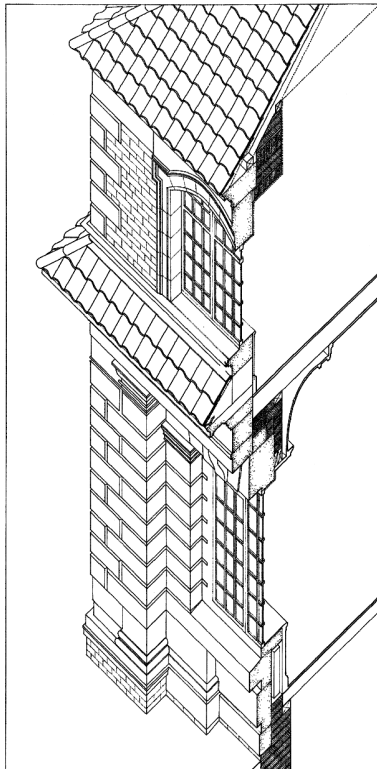


図20 Heathcote

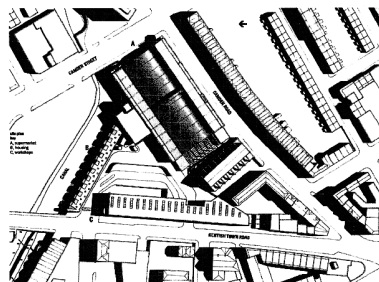


図21 Superstore for Sainsbury



図22 Superstore for Sainsbury



図23 Superstore for Sainsbury



図24 Superstore for Sainsbury



図25 Superstore for Sainsbury

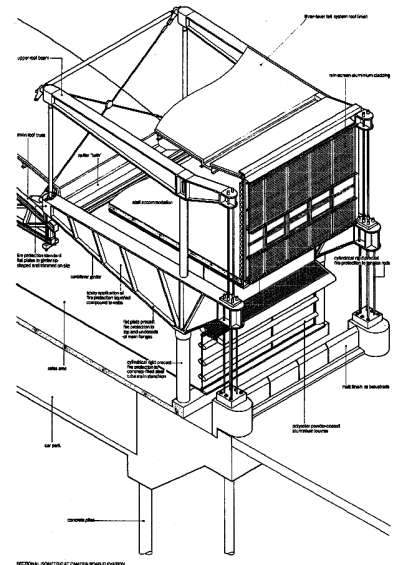


図26 Superstore for Sainsbury

ると共に、正面のファサードはスーパーマーケットのかたまりを支持する試みをしている。Grimshaw の特徴的なアクロバット構造により実現している。第2は、運河沿いのテラスは運河を見下す未来志向的なスペース・カプセルで南側は直接サービスヤードに面しているの北側の光しか取り入れられないが凸面のアルミ壁と2層高の空間に高窓がつけられて巧みに処理されている。

店の構法について、先ずコンクリート杭が用いられている。店空間を支える支柱は、コンクリート充填された鋼管で円柱形の固形プレキャスト耐火被覆がされている。図27は鋼構造の形の設計結果を示している。単純化、基礎への荷重の流れ、構造の外側の立面を示している。図28は構造が7つの要素(部材)で構成されることを示す。主体屋根トラスはそれぞれの端で片持梁により支持される。この梁は支柱に7mのスペンで、吊り下げロッドへ2.4mある。そのロッドは下の地階を通過して新しい杭基礎にアンカーされる。2階では屋根梁は同じスペンであるが支柱とラチス梁によって支持される。全部材が建物の長手に沿って心々7.2mで繰り返している。これら構造要素(部材)の望ましい形を考えて、既存の製造業者から入手できる全て在来の成形技術を利用した。建設の軽さと成形の容易、経済性から鋼を選択し

た。

安定性は、吊り下げロッドと一緒に働く支柱により支えられる。図29にみられるように屋根構造内の挙動は主屋根トラスと片持梁の間のハンガー・コネクションにおいて調節される。図30に建方順序を示している。

建築家は、この店に要求されるものを達成するために露出鋼構造を要求した。しかし、建て込んだ地域での小売りの開発であるので鋼は2時間耐火が要求される。そこで、比較的高価であるが、全ての基準を満足させる膨張性エポキシ材料を用いた。成形固形シートとしても滑らかな仕上げで薄くでき、また、吹付け・コテ塗りもできた。Camden Road から見える露出した鋼梁と引張ロッドは全て膨張性エポキシ耐火コーティングがなされた。

店の仕上げについて、屋根は3層フェルト・システムの仕上げで、溝の中の最大予想水位の上の単純な‘S’ガスケットは屋根仕上げの挙動を吸収する。溝は、各構造ベイの各端部で鋼骨組のまわりに建て込んだ屋根の間で一連の‘baths’として呼ばれる。2つの出口が各ベイから用意され、オーバー・フローは1つの bath から

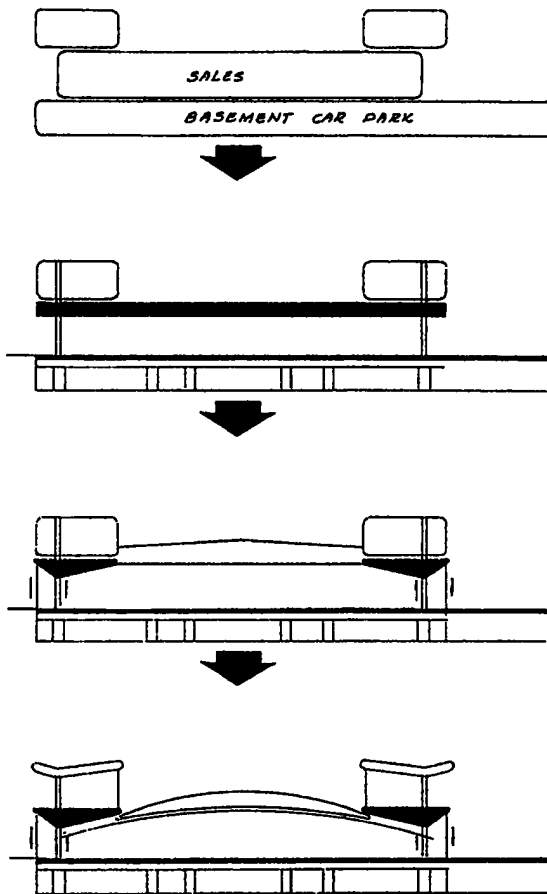


図27 Superstore for Sainsbury

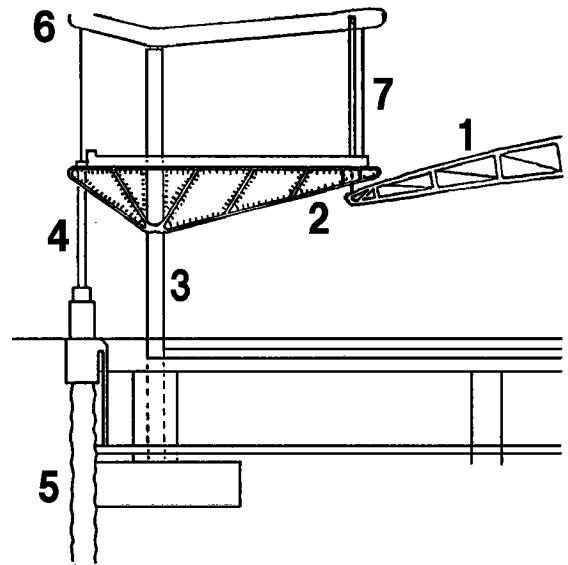


図28 Superstore for Sainsbury

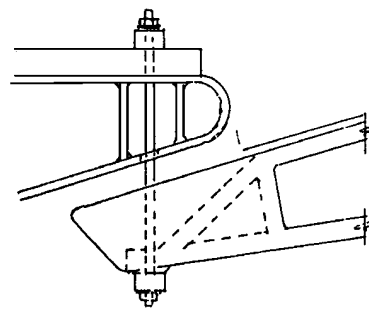


図29 Superstore for Sainsbury

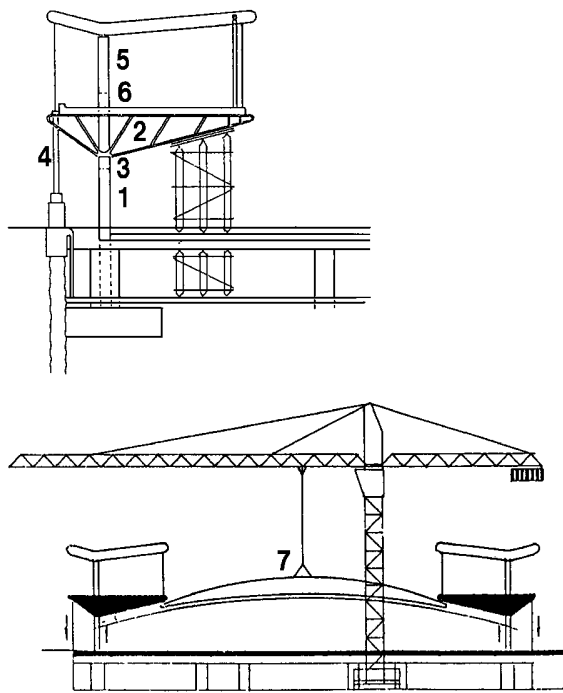


図30 Superstore for Sainsbury

次へ連絡している。ムーブメント・ジョイント・ガスケットは水平方向だけでなくそれぞれの片持梁の端部のまわりにもめぐらされている。

Camden Road 側の正面 2 階（スタッフ住居）の外装は、ポリエステル粉末コートしたアルミの Rain-screen 外装パネルで色は海の青。この仕上げは 10 年保証である。外装パネルは真空成形プロセスによる 1.6 mm 厚のものだが外表面を形成する壁は 540 mm 厚で内表面には在来のプラスタ塗りのれんが積みとなっている。さらに、50 mm 厚の断熱材がれんが積みの外面と窓裏地の回りに用意されている。パネルは軟鋼のアンクルとチャンネルの骨組に支えられている。アルミ窓枠はパネルと平面（面一）で、水平・垂直方向にパネルと同じ方法で取り付けられている。パネルと屋根仕上げの交点は、1.6 mm 厚のアルミ笠木で被覆されている。

売場の外装ガラス（Camden Road の歩道側）は透明な合せガラスでシリコン・ジョイント。その外側には視界をさえぎらないアルミ・ルーヴァー。ルーヴァーはポリエステル粉末コートしてあり日中は光を店の中へ取り入れ、夜は安全のため閉められる。歩道との境界にはステンレス孔あき板の手摺を設けてあり、つや消し仕上げとなっている。店の天井はアルミの吊り天井で有孔エナメル白仕上げ。

地階の駐車場のスクリーンは、エキスパンデッド・メタルの網で亜鉛コート仕上げ。

運河横の住居は、スチール、アルミ、ガラスという今日の材料で設計された。2 層の高さのスタジオ Studio・リビングルームを含んでおり、空間には南からの陽光を

反射するルーヴァー・システムを有している。全部ガラス張りのリビング・スペースは深く後退しており、バルコニーの木製の手摺は運河から到着した訪問者を船内へと導くハネ橋のようである。リビング・ルームの窓は、移動住宅のようであり、内壁は白いプラスタ塗り、床は板張り（フローリング）、階段の手摺は金属で腰板はガラスである。

Ⅲ. おわりに

ロンドン北部の Finchley を出発点として南下して Central へ向かったが、建築を観察しながらの行程とあって進み方は遅れがちとなる。Central 入口の Camden に到達したところで 1 区切りとして、以後の行程は（その 2）へ譲りたい。

年代を超えて今日のロンドン建築として評価される幾つかの建築について観察したが、イギリス建築の奥行の深さを感じさせられる。少し時代をさかのぼったところに今日のロンドン建築の多くの名作が存在し生き続けていることに驚きが大きい。各地に存在する建築が小品でも輝き続けていることがハイテク建築など優れた現代建築を生む原動力になっていると思われる。

謝 辞

平成 15 年 9 月 1 日から 1 年間学外派遣研究員としてロンドンに派遣して下さった国土館大学、同工学部、同建築デザイン工学科に心から感謝申し上げます。また、受入れ先の RIBA 王立英国建築家協会および RIBA Library 同図書館館長の Ruth H. Kamen 氏に心から感謝申し上げます。

原稿作成にあたり全面的にご協力いただきました玉岡美香さんに心から感謝申し上げます。

参 考 文 献

- 1) Ken Allison: London's Contemporary Architecture, Architectural Press, 2003.
- 2) Bridget Cherry and Nikolaus Pevsner; The Building of England London 4: North, Penguin Books, 1998.
- 3) John Allan, Berthold Lubetkin, RIBA Publications, 1992.
- 4) The Architect and Building News, January 10, 1936.
- 5) Ove Arup: Planning in Reinforced Concrete Part 1, Architectural Design and Construction, July, 1935, No. 9.
- 6) A. S. G. Butler, The Architecture of Sir Edwin Lutyens vol. 1 vol. 2, Country Life, 1950.
- 7) Christopher Hussey, The Life of Sir Edwin Lutyens, Antique Collectors' Club, 1950.
- 8) Architectural Monographs 6, Edwin Lutyens, Academy Editions London, 1979.
- 9) The Architects' Journal, August 6, 1986.
- 10) The Architects' Journal, October 4, 1989.
- 11) The Architectural Review, October, 1989, No. 1112.